

第四のがん治療法

免疫細胞療法

がん4大治療法の特徴

外科療法	(長所)がんを適切に取り出す確実な方法。がんの進行度が切除した標本から調べられる。(短所)手術というストレスが大きく、一時的に著しい体力低下を受ける。さらに、正常な部分も一部切除される場合がある。
化学療法	(長所)全身に広がった細胞レベルのがんを攻撃することが可能。点滴による治療が中心で、繰り返し容易に行える。(短所)がん細胞と同時に、正常細胞にも影響を与えてしまうため、副作用がでることが多い。
放射線療法	(長所)切除できないような奥にあるがんであっても、局所的に治療ができる。(短所)がん以外の周囲の臓器も照射して障害を起こすことがある。また、治療設備が大掛かりで照射回数にも限界がある。
免疫細胞療法	(長所)副作用がほとんどなく、がんを狙い撃ちする治療を望める。治療回数に限界はなく、何度でも行える。標準治療と併用可能 (短所)未だ研究段階の医療と考えられているため、不確実な面もあり、保険の適用がない。自由診療

厚生労働省の調査によると、がんによる死亡者数は約三十二万六千人(平成十七年度)、がん罹患する生涯リスクは、男性が四十六・三%、女性が三十四・八%と高い比率を占めている。現在、がんに対する標準治療として、外科療法(手術)、化学療法(抗がん剤治療)、放射線療法が、三大治療法として実施されているが、これらを補填する第四の治療法として、『免疫細胞療法』への関心が高まっている。そこで、東京女子医科大学関連施設のバイオセラクリニク院長 谷川啓司氏に話を聞いた。



医療法人社団バイオセラ会 **バイオセラクリニク**
院長 **谷川 啓司** 先生

1990年に防衛医科大学卒業後、東京女子医科大学消化器外科入局。外科医として消化器癌患者の治療に携わる。1996年、米国ミシガン大学腫瘍外科で、癌免疫療法の研究に従事。1999年帰国後、外科医としてだけでなく、東京女子医科大学癌免疫細胞療法チームとして癌免疫療法の臨床研究に従事する。2001年8月、東京女子医科大学の癌免疫療法関連施設としてバイオセラクリニクを開設。
医学博士 東京女子医科大学消化器外科 非常勤講師

『免疫細胞療法』とはどのようなものですか？

私たちの身体は、さまざまな病気が自分を守り、正常な状態を維持しようとする働きを持っています。この働きを免疫と呼びます。病気を起こしているものは、ウイルスといった外界から来る異物により起こることがほとんどです。がんも私たちの身体にとっては正常ではない異物ですが、もとはといえば自分の正常な細胞が遺伝子変異を起こしたものです。つまり、外界から来るものに比べて明らかに正常に近い異物なのです。したがって私たちの免疫機能はこのがん細胞を異物として認識し排除することが難しいのです。

『免疫細胞療法』とは、このように排除されていない異物としてのがん細胞を、強制的に排除させようとする治療法です。採血により、この排除を担当している免疫細胞であるリンパ球を

取り出し、体外で様々な刺激を与えたものを、点滴で身体の中に戻してあげる治療法が、「活性化自己リンパ球移入療法」と呼ばれています。

しかし、排除するはずのリンパ球は、がん細胞を認識していなければ役に立ちません。そこで、リンパ球たちのがん細胞を認識させるように、がんの情報をリンパ球に教育させようとするものが、「樹状細胞ワクチン療法」と呼ばれています。

『免疫細胞療法』の特徴について教えてください。

『免疫細胞療法』は、人間が持つ自然治癒力を人為的に強める治療法なので、他のがん治療に比べて副作用の少なさが特徴です。従来の標準治療(手術、抗がん剤放射線治療)との併用も可能です。手術後に再発の確率が高いと診断された場合、手術後の再発抑制

を目的とした治療として有望視されています。また、進行がんや再発してしまったがんにおいても、副作用があまりなく、患者さんに高い生活の質(QOL)を保ちながら、がんとの共存を目指すにはいい治療となりえます。

しかしこの治療法は、現時点で研究段階の医療であり、保険適用になっておりません。したがって、『免疫細胞療法』をお考えになる場合、その利点・不利益について十分ご理解頂くことが重要です。

がん治療の副作用とその影響について

がんを告知された患者さんは、誰でも不安に満ちた心理状態になります。その結果、多くの患者さんは不眠に悩まされ、咳・頭痛など風邪の症状でさえ、「転移」という言葉がよぎり、心も病んでしまつたのです。

がんが発見された時に、ある程度進行してしまっている場合には、抗がん剤治療が行われます。現在これを超える強力な治療はありません。ところが、抗がん剤治療による副作用という症状は、治療効果に関係なくよく出現します。このことが、特殊な心理状態の患者さんにとっては、様々な影響を与えます。

つまり副作用があっても、「がんの進行による症状ではないか」という不安です。このような心理状態の患者さんに治療を行う医師は、それがどんな治療であっても、

十分に心のケアの気持ちをもって診療に携わっていただきたいものです。

エビデンス(統計学的証拠)に基づく治療を行っても、進行がんの場合はその効果が期待できなくなる時期が残念ながら訪れます。その際、担当医からホスピスに行くことを、いと簡単に勧められるケースが多いようです。しかし、患者さんや家族はそう簡単に割り切ることはできません。治療をもちたらずもなくて苦痛が少なく高いQOLを保ちながら、できるだけ長生きすることにかけてみたいと治療を希望される方は少なくありません。

患者さんの立場に立つて目指す医療とは？

科学的な根拠に基づく標準治療を行なうことは大変重要です。但し、患者さんや家族としては、苦痛は少なく、さらに治療効果を少しでも上げたいと思うのは当然の気持ちです。

『免疫細胞療法』は、まだ研究段階の治療法ですが、標準治療の効果を増強させたり、抗がん剤治療などの副作用を軽減させたりする可能性は、以前より示唆されており、

治療費の問題など課題は多いのですが、先端医療としてのがん治療を行いつつ、心のケアという立場をしっかりと持った全人的な医療を行うことが、がんの医療に携わる医師としての使命であると考えています。